

INDEX 2 国連Weeksの成果を振り返る／ソフィアの視点 3 後援会総会・会長のご挨拶／地球市民講座が開講 4 上南戦 2年ぶりの単独優勝／浴衣デー

教皇フランシスコと学生たちのオンライン対話が実現

Building Bridges Across Asia Pacific

6月20日、森永恵理華さん(組織神学専攻後3)、大門由依さん(死生学専攻後1)、有澤里穂さん(外英3)が、日本代表として、Building Bridges Across Asia Pacific : A Synodal Encounter between Pope Francis and University Students アジア太平洋地域に橋をかける～教皇フランシスコと大学生が「ともに歩む」ための出会い～(シカゴヨロラ大学主催、教皇庁ラテンアメリカのための特別委員会共催)に参加した。

この「Building Bridges Initiative」は、教皇フランシスコが2022年に始めたプロジェクトで、世界各地の学生がローマ教皇と直接対話するという史上初の試みである。今回は東アジア・東南アジアをはじめとするアジア太平洋地域の国々の学生が参加した。

教皇との対話に先立ち、各国の学生たちは地域ごとにテーマを設定。グループディスカッションを重ね、教皇と代表学生によるオンラインミーティングに臨んだ。日本の参加学生27名(上

智大学19名、エリザベト音楽大学5名、他大学3名)は、角田佑一神学部准教授と山内保憲神父(カトリック・イエズス会センター)の指導のもと、5月に計3回のミーティングを行い、持続可能な地球環境、経済的正義、人間の総合的発展のために、具体的な解決方法やプロジェクトについて深く考え、意見を分かち合った。

そして迎えた6月20日、各国の代表メンバーはグループでまとめた発表内容を教皇に伝え、自由闊達な会話が繰り広げられた。

角田准教授は、「学生たちはグループでの分かち合いを通じて、対話の豊かな実りを体験できた。教皇フランシスコとのオンライン対話では、教皇が大きな愛をもって学生のさまざまな質問に丁寧に答えてくださり、そのメッセージから多くの気づきを得ることができた」と語った。

当日の様子は、シカゴヨロラ大学のYouTubeチャンネルで視聴することができる。



カトリック・イエズス会センターでライブストリームを見る日本メンバーたち

2024年度 学業優秀賞授与式
成績優秀者168人に授与

7月5日、6号館101教室で2024年度上智大学学業優秀賞授与式が行われた。この賞は、学業成績などにおいて極めて優秀と認められた2年次から4年次の学部生に贈られるもので、今年度は各学部から推薦された168人が表彰された。

式の冒頭、曄道佳明学長が「いま学部時代に学んでいることは、皆さんの軸となり、価値観の広がりを生み、やがてそれらは今後社会を生き抜いていくうえでの基盤となるでしょう。この先はその基盤から何が発揮されるか考えることが重要になってきます。この学業優秀賞が皆さんにとってひとつの契機になることを強く期待します」と未来への期待を込めた祝辞を述べた。

続いて、永野仁美学生センター長が選考経過を報告し、学科ごとに受賞者の名前が読み上げられた。曄道学長から各学科の代表学生に賞状が手渡され

謝辞を述べる
佐久間真愛さん受賞者をたたえる
曄道佳明学長

ると、会場は温かい拍手に包まれた。

最後に、受賞者を代表して佐久間真愛さん(国教4)が登場。「日本にいたがらも多様なバックグラウンドを持つクラスメイトと共に議論を深めていくなかで、自分の意見を発信することの重要性を学び、さまざまな考え方に触れることができました。ここで得た知識と多角的な思考力を活かし、日本と海外の架け橋となる人材へと成長していきたいです」と謝辞を述べ、式は終了した。

「インドウィーク」
シンポジウム・ワークショップ開催
インド工科大学デリー校との協定締結を記念

7月1日から3日、四谷キャンパスで「上智大学インドウィーク」が開催された。

本学は、急速な経済成長と豊富な市場機会を有するインドをグローバル化推進の戦略的展開地域のひとつと位置づけ、今年4月にインド工科大学(デリー校、以下IITD)と連携協定を締結した。今回、両校の協定締結を記念し、シンポジウム「日本とインドの未来：大学の役割」や、上智大学とIITDの研究者によるワークショップが行われた。

初日のシンポジウム「日本とインドの未来：大学の役割」では、シビ・ジョージ駐日インド大使による基調講演が行われた。続いて、IITDのゴメス教授、東洋大学大学院のクマール教授、帝人インディアの岡田氏、JICA南アジア部の伊藤氏、JETRO企画部の中山氏、JSTさくらサイエンス推進本部の西川氏が登壇し、元本学理工学部教授で現IITDの東善郎客員教授の進行により、産学官の視点から日本とインドのパートナーシップの現状と今後の展望について議論が交わされた。

2日目には、理工学部主催のワークショップ「機械工学—ヘルスケアと産業機械—」が開催され、両大学の研究発表とラポツアーが行われた。また、経済学部主催のワークショップ「University Students in India」では、日印両国の大学生活の様子が報告された。



基調講演を行うシビ・ジョージ駐日インド大使



専門家が登壇したパネルディスカッション両国の学生が、留学先としての日印それぞれのメリットについて紹介した後、意見交換と活発な質疑応答が行われた。

3日目には、理工学部主催のワークショップ「持続可能な都市型交通」が開催され、東京大学、千葉大学、(株)本田技術研究所や東京地下鉄(株)からもゲストスピーカーが登壇し、先進的な研究発表と活発な質疑が行われた。

いずれの会場にも在生だけでなく他大学からも参加者が訪れ、本学とIITDとの協働が、日本とインドの大学・産業界との連携強化につながることを大いに期待しつつ、3日間の日程を終了した。

2024年度学業優秀賞 受賞者一覧

◆神学部	社会学科	牧浦 穂菜美	市河 里菜
神学科	大森 涼奈	松下 遥	遠 健也
小泉 日和	堀川 沙愛	志波 茜里	今井 美月
岡野 日和	LIU SIYI	高木 帆乃里	越智 悠那
石田 咲子	社会福祉学科	LAU KAR HAY CARMAX	西村 明里紗
◆文学部	井原 由南子	小向 彩佳	大野 他1名
清端 響太郎	教原 結衣	桐ヶ谷 帆香	◆国際教養学部
小林 由	金子 美紀	木俣 明日香	国際教養学科
一井 彬人	看護学科	細川 未智	内野 彩乃
史学科	橋爪 彩加	田中 小菜美	FOLLMER RYAN MATTHEW
奥田 茉莉阿	山崎 優菜	◆外国語学部	井上 望星
宮 ひなた	石崎 碧衣	英語学科	LE DUONG NGOC TRAM
木村 帆花	◆法学部	内藤 好乃	HUANG WEIHSUAN
国文学科	法律学科	KIM CHANMEE	DSOUZA VANESSA
藤江 桜	早坂 菜々恵	古殿 千遥	本谷 菜那
池田 茉莉百	天野 航陽	KIM SOJUNG	龜山 愛華
菊岡 駿一郎	岡村 朋香	有澤 里穂	佐久間 真愛
◆英文学科	古川 暉彩	菊地 侑里伽	IBANEZ KYLA FAYLON
龜谷 結花	上野 友倫子	栗田 えま	井上 菜々香
福田 碧海	鈴木 幸世	東 怜未	DAI SHUMIN
飯沼 百楓	松井 仁和	石田 とねり	◆理工学部
貴志 尊	井守 朝陽	内川 恵利加	物質生命理工学科
吉澤 理子	村上 大輝	杉浦 萌夏	本間 いまり
吉澤 亜琳	国際関係法学科	長手 愛奈	瀧本 彩華
ドイツ文学科	塩中 大翔	ドイツ語学科	森木 菜津美
山田 莉那	西 まな美	柏原 伶音	武智 真由
土屋 更紗	石井 健斗	河内 陽菜乃	佐々本 瑛美
前原 琳	川口 真奈	城山 月花	山口 菜奈
◆フランス文学科	平本 夢乃	フランソワ語学科	長井 珠李
佐藤 華奈瑠	古川 瑛理	山田 陽斗	柴田 柚
谷口 萌絵	地球環境法学科	原口 佳子	小倉 響
佐藤 愛由子	中村 百花	北原 未彩	機能創造理工学科
新聞学科	加藤 千夏	イスマニア語学科	栗林 蓮
吉田 彩里	石垣 沙良	高橋 樹	佐竹 若葉
ESTEVEZ TAKASHIMA ELISA	◆経済学部	麻生 知佐	本田 悠騎
本正 凜	経済学科	小俣 逸花	及川 大樹
相良 怜音	石井 玲欧	小俣 逸花	岡田 麟
多田 英樹	川崎 正雄	中島 陽菜	岡田 維摩
マドロン 美濤	櫻田 優美	高橋 瑞生	土橋 裕太
野口 莉佳	湯浅 創太	高橋 瑞生	渡辺 勇太
島田 遥	吉川 啓太郎(パートホッカー)	ポルトガル語学科	山澤 隼
林田 真子留	甲斐 さら	RYU ICHIN	情報理工学科
◆総合人間科学部	後藤 広樹	UTIDA JOAO	香村 優奈
教育学科	齋藤 菜莉	富山 真歩	池永 壮真
河合 遥音	鷹野 瑞香	◆総合グローバル学部	美羽 悠希
服部 有彩	青山 春花	総合グローバル学科	岸本 智行
三橋 大雅	遠藤 穂乃香	菅井 絢香	岡田 藤未
心理学科	CAO PEINING	飯田 芽生	後藤 由依翔
花里 和葉	経営学科	TANG JIAYAN	井口 珠実
三田村 理沙	吉田 璃多	中野 舞音	上田 恭平
小栗 彩加	野本 真緒	林 美奈	

第21回上智大学国連Weeks 植木安弘教授が成果を振り返る

6月7日から24日まで、「第21回上智大学国連Weeks」が開催された。「国連の活動を通じて、世界と私たちの未来について考えよう」のコンセプトのもと、11年目を迎えた今回も、平和構築、人道支援、気候変動など幅広いテーマでシンポジウムなどが企画された。在学生の他、高校生や一般も含め、来場・オンライン合わせて参加者は1,000人に達した。

国連の広報局や事務総長報道官室などの業務に約30年従事し、現在は国際協力人材育成センター所長として



18日のイベントでは国連システム学術評議会(ACUNS)のフランツ・パウマン会長が登壇した

連Weeksを牽引する植木安弘教授(グローバル・スタディーズ研究科)が今回のイベントを振り返る。

世界の分断化がより顕著になり地球規模の課題がより深刻なものとなるなか、日本にとっても関心の高い問題が取り上げられました。

「中東和平を考える」では、発生から10ヶ月が経過するガザ戦争の歴史的背景やパレスチナ問題に関して専門家を交えた議論が行われ、今後の和平実現に向けて考える機会となりました。

第二次世界大戦下、杉浦千畝領事とともにオランダの外交官も発給した迫害ユダヤ人への「命のビザ」の歴史的経緯を示す展示と講演会も開催され、人道支援に対する先人の思いに触れることもできました。

気候変動に関するシンポジウムでは、地球温暖化がもたらす人類生存の危機や、特に子どもへの深刻な影響、集中豪雨がもたらす洪水分析などが専門的観点から議論されました。このシンポジウムには、元国連事務次長補や国連児童基金(ユニセフ)の事務局次長などのハイレベルな登壇者をお迎えし、SDGs達成に向け参加者と意見交換が行われました。

さらに、ウクライナやガザ、アフリカなどにおける平和構築・復興支援に関わる日本国際協力機構(JICA)の役割の説明や、国連システム学術評議会(ACUNS)年次大会の一環として本学がスポンサーとなった「人間開発報告書」の最新版の紹介などがありました。

国際協力・国際機関キャリアセッションでは、世界食糧計画(WFP)駐日代表による講演の後、国際協力人材育成センター(SHRIC)のアドバイザー・ネットワークの方や外務省国際機関人事センターによる対面のクロストークがあり、学生や一般の方に加え多くの高校生も参加しました。

ほとんどのセッションは対面とオンラインのハイフレックスで行われ、質疑応答の時間も含めて活発な議論が行われました。近年は多くの高校生の参加も見られますが、さまざまな問題を自らの問題として考える良い機会になったのではないのでしょうか。次回は、10月に国連Weeksを予定していますので、奮ってご参加ください。

公式ウェブサイトにてイベントレポート掲載中。



植木安弘教授

留学フェア 先輩学生による 体験談や座談会を実施

6月17日から21日にかけて、グローバル教育センター主催の留学フェアが開催され、海外留学を希望する学生が期待を胸に各イベントに足を運んだ。

期間中、昼休みの時間に日替わりのセッションを実施。留学制度や留学準備に関わるレクチャーのほか、留学プログラムを利用した先輩学生による体験談や座談会、協定校からの留学生による自大学紹介、キャリアセンター職員による留学経験者のための就職活動ガイダンスなどが行われ、延べ約500人の学生が参加した。

座談会に参加した学生からは、「渡航の前に準備しておいた方が良いことは?」、「語学能力向上のためにやったことは?」、「海外で行うインターンのメリットは?」などの質問が寄せられ、先輩学生が丁寧に回答していた。実体験に基づく具体的なアドバイス



留学を希望する在学生から多くの質問が寄せられた

聞くことができ、参加者にとっては有意義な情報収集の機会となった。

また、6号館1階では多様な留学プログラムの紹介に加え、留学体験談や上智で学ぶ交換留学生たちの出身校紹介などのポスターが展示され、通りかかる多くの学生が足を止める姿が見られた。

グローバル教育センター担当者は、「今年度は初日の参加者が3割増加した。各日のセッション終了後にも担当者への質問が多く寄せられ、留学への熱気の更なる高まりを感じられた。今後も秋の留学ガイダンスや各プログラムの個別の説明会など、当センター主催の情報収集の場を積極的に活用してほしい」と呼びかけている。

ソフィアの視点

導入3年目を迎えた基盤教育

～生涯学び続ける力を養うための上智の挑戦～

学務担当副学長 伊呂原 隆



2022年度に導入された「基盤教育」。急速に変化する社会と未来の予測が難しい現代において、学生時代に学んだ知識はいずれ通用しなくなります。このような認識のもと、卒業後も学び続けるために、自律的な学修者の姿勢を身につけることが基盤教育の目的です。

基盤教育は、専用の科目があるわけではなく、上智大学が提供する全ての科目を通じて行われます。多角的な視野を得る「全学共通科目」、専門分野を深める「学科学目」、外国語や異文化を理解する「語学科目」。学生は4年間をかけて、これら3種の科目の組み合わせを自ら設計し、受講者同士で議論したり、多くの書籍に触れ自らの考えを深めたりすることによって、生涯にわたって社会を生き抜くための人生の「基盤」を確立していきます。

なかでも特徴的なのが、全学共通科目です。いろいろな分野の入門レベルの科目のみで構成されているというイメージがあるかもしれませんが、そうではありません。基盤教育の実現にあたり、科目ナンバリング(科目の水準や系統を示す番号)で言う100番台(導入レベル)から、200番台(展開レベル)、300/400番台(探究・統合レベル)の科目まで用意しました。専門性を深めた3、4年次においても、それにふさわしいレベルの人間理解、思考様式、教養等を全学共通科目で学ぶのです。

例えば、全学共通科目の300/400番台の科目に「交渉学入門」があります。この科目で学ぶ、相手を引き込む手法は、経済学部生であれば企業間連携の研究に、総合グローバル学部生であれば国際紛争の解決手法の研究に生かせるでしょう。同様に300/400番台の「データサイエンス」科目で実践的な分析手法を学べば、文系学部生でも自身の研究で定量的なデータに基づいた数理的アプローチが可能になります。

こうした学び方のコンセプトや履修の考え方を、学生にしっかりと理解してもらうため、基盤教育の導入として入学前教育「学びを学ぶ」を開始しました。文系/理系、教養/専門、自学科/他学科といった枠にとらわれず、その人ならではの学びの広げ方、深め方をデザインする上智ならではの仕組みを、フルオンデマンド形式で入学者全員にレクチャーしています。

学問分野を問わない多彩な科目を選択肢として自らの学びをデザインできるのは、9学部10研究科がワンキャンパスに集まる上智大学だからこそ。物事をさまざまな角度から見る、多面的な価値観が身に付けられます。「人生100年時代」において、学生時代はまだ序盤に過ぎません。大学をゴールと捉えるのではなく、長きにわたる人生の基盤をつくる成長の場と捉えるならば、上智大学には、それにふさわしい最上の環境が整えられています。

世界各国からの寄付で建造されたキャンパスのランドマーク 1号館が東京都選定歴史的建造物に選定

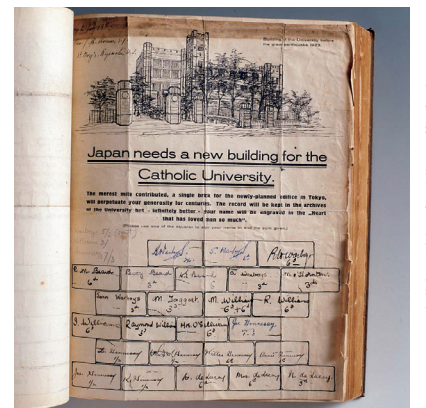
四谷キャンパスの1号館が、6月14日付で東京都選定歴史的建造物に選定された。東京都選定歴史的建造物とは、歴史的な価値を有する建造物のうち、景観上重要なものとして、東京都景観条例に基づき東京都知事が選定するもので、上智学院所有の建造物としては初めて選定された。

1号館は、1932(昭和7)年に竣工し、第二次世界大戦中の東京大空襲を逃れ現在に至る。大正から昭和初期にかけ、日本各地のカトリック教会を設計したスイス人の建築家マックス・ヒンデルが手がけたドイツ風の学校建築で、ヒンデル作品の残存例として貴重であることも評価された。2022年9月には、同建物前に学生たちの憩いの場であるS-TERRASSE(Sテラス)が併設されるなど、現在もキャンパスのランドマークとして親しまれている。

1930年定礎の1号館の建築資金は、寄付によって賄われた。募金活動を主導したのはドイツ人のブルーノ・ビッテル神父で、ドイツ国内だけでなく、オランダ、フランス、アメリカなどのカトリック教会・学校宛てに寄付を呼びかける用紙を送付した。「レンガ募金」と名付けられたこの募金活動では、募金用紙に描かれた「ライヒス



1号館外観と併設の5テラス



寄付者の筆跡が残る募金帳

マルク(当時のドイツ公式通貨)」の印字が入ったレンガのイラストに、各寄付者の署名が記された。複数のレンガへの署名や、金額が1ライヒスマルク未満に書き直されたレンガもあり、当時の1号館が各国の名もなき人々の善意によって竣工に至ったことが伝わってくる。この募金の記録は、現在もソフィア・アーカイブズで保管されている。

2024年度 上智大学後援会総会

学生生活を多方面から支援

上智大学後援会では、例年5月に総会を開催し予算・決算などを審議している。今年度も、役員をはじめ多数の会員(学生の父母・保証人)が出席した。総会では、2023年度決算、2024年度予算、および2024年度役員改選の議案3件が審議され、全て承認された。

2024年度の予算のうち、大学への寄付の総額は3204万2千円。寄付項目には100円朝食への支援やWEB面接用ボックス「テレキューブ」レンタル費用支援が含まれるほか、外国人学生も含む全学生対象の奨学金や派遣交換留学生奨学金など、学生生活のあらゆる面を支援するものとなっている。

また、役員改選の承認に伴い、2023年度副会長であった米澤実氏(国際教養学部4年次生保証人)が第47代会長に就任した。

総会に続き、文学部国文学科の本廣陽子教授により「平安文学と『源氏物語』の世界」と題した講演会が開催された。現在放送中のNHK大河ドラマにも通ずる内容に参加者は興味深く聞き入っており、「平安時代における物語や女流作家の位置づけまで知ること



父母・保証人が学生支援予算などについて審議した

ができ、新鮮だった」などの声が寄せられた。講演終了後には懇親会も催され、会員同士の交流に加え、学生課外活動団体によるパフォーマンスが行われた。

上智大学後援会は1973年に発足。会費は、大学の教育研究環境の改善など、さまざまな目的のために使用されている。

入会方法など後援会についてのお問い合わせは、総務局ソフィア連携室内・後援会事務局まで。電話03(3238)3127

▶上智大学後援会WEBサイト

<https://piloti.sophia.ac.jp/jpn/guarantors/parents/>



後援会会長 新任のご挨拶

上智大学後援会会長 米澤実



本年度、上智大学後援会会長を務めさせていただくことになりました。在学生のご父母・保証人の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

上智大学後援会は1973年に設立されました。イエズス会の先生方が給与から最低限の生活費を除き、教育環境向上のために寄付されていることを当時の在学生父母が知ったことがきっかけです。後援会からの支援内容は時代に応じて変わって参りましたが、父母・保証人の立場からも、より充実した学生生活の支援に貢献したいという想いは50年以上経過した現在でも変わっていません。

現在の支援内容は、安全・安心な学習環境の提供、学生の自主的な活動の支援、さまざまな機会や経験を提供する支援など多岐に渡ります。キャンパス内の食堂で朝食を100円で提供する「100円朝食」や目白聖母キャンパスの昼食補助は、学生を経済と健康の面から支援しています。就学支援となる奨学金や課外活動団体への助成は、経済力と自主的な活動を応援しています。WEB面接用のボックス「テレキューブ」のレンタル、留学に関わるアドバイザー費用の補助、新刊図書購入の補助は、さまざまな機会への挑戦を後押ししています。

こうした支援内容のご理解を深めていただくため、後援会会員の方々に大学を身近に感じていただくことも重要な役割のひとつです。懇親会は、理事長、学長、学部長はじめ多くの先生方にご参加いただき、直接お話いただける機会となっています。そして、今年度は新企画として、11月に四谷キャンパスのガイドツアーを行います。後援会が支援する施設などを学生のガイドによりご見学いただく予定で、ツアーの後には会員同士の情報交換会も開催いたします。

このように上智大学後援会は、大学に寄り添い、学生がより良い環境で学生生活を送ることができるようお手伝いをしています。多くの皆様にご理解をいただき、一緒に学生の支援を行っていただけますよう、心よりご入会をお待ちしております。

上智大学は、新たな公開講座となる「上智地球市民講座」を4月から開講した。社会人、大学生、高校生など約500名が受講し、数か月にわたり活発な学びと知識の交流が展開された。

7月までの春学期には19の講座が開講。一部の講座はオンラインでも参加可能で、関東だけでなく全国や海外からも多くの受講者が集った。

総合人間科学部教育学科の相澤真一教授による「日本社会の格差と教育」では、教育社会学の観点から、格差と



世代を超えて多くの受講者が集まった(相澤教授の講義)

「上智地球市民講座」の春学期が開講 多世代が共に学ぶ、新たな教育プログラム

教育の関係や、時代・世代・地域の違いなどを考慮した深い議論を展開。講義では毎回クイズが出題され、受講者はグループワークを通じて知識を深め合った。

カトリック・イエズス会センターイエズス会の山内保憲神父が担当する



自らの介護体験や自己と組織の変革について語る山内神父

「個人と組織の『自己変革』とイノベーションのプロセス-イエズス会の精神性が教える、個人・組織・社会を根本から変容させる方法論-」では、イグナチオ・デ・ロヨラの霊操や、山内神父の介護経験をもとに、自己と組織を変革するために必要となる具体的なプロセスが語られ、受講者同士で自身の変革体験を共有する場面も見られた。

受講者へのアンケートでは、「本を読むだけでは知り得ない内容を教えてもらった」、「私たちが取り組むべき未来への課題を理解し、周りを巻き込みながらできることをやっていきたいと思う」など、満足度の高い声が寄せられた。

枝川寮のボッシュ神父像に功績を称える銘板を設置 学生を愛し続けた舎監長

本学創立110周年を記念し、枝川寮中庭のボッシュ神父像に功績を称える銘板が設置され、6月24日、お祝いと感謝の祈りの会が行われた。

イエズス会のフランツ・ボッシュ神父(1910~58)は、ドイツ出身で、1940年に来日。本学で教壇に立つ傍

ら、第二次世界大戦後の学生たちを住宅難や食糧難から救うため、学生寮の開設に奔走した。1948年、米軍払い下げのカマボコ型兵舎をキャンパス内に移築し開設された学生寮は、舎監のボッシュ神父にちなんで「ボッシュ・タウン」と呼ばれた。

ボッシュ神父は、ボッシュ・タウンの舎監長として真摯に学生たちと向き合った。その厳しくも愛にあふれる指導から、「オヤジ」の愛称で親しまれていたが、1957年、四谷キャンパス内



枝川寮中庭のボッシュ神父像

の上智会館(現在の6号館がある場所)に待望の男子学生寮が新設された翌年、48歳という若さで急逝した。

1959年、ボッシュ神父を慕う人びとによって建立された胸像は長く上智会館前にあったが、枝川寮の開設後はその中庭に移され、今も変わらず穏やかなまなざしで学生たちを見守り続けている。

【お知らせ】

秋学期(10月開講)の受講者を現在募集中。詳細情報や受講申込は、上智地球市民講座WEBサイトを参照。

▶上智地球市民講座WEBサイト

<https://sgcp.sophia.ac.jp/>

▶お問い合わせ

上智大学 学事局 Sophia Future Design Platform推進室
global-citizen-co@sophia.ac.jp



2023年度決算・2024年度予算

2024年2月開催理事会および2024年5月開催理事会において、2023年度決算ならびに2024年度予算が承認されました。2023年度事業報告書および2024年度事業計画書については、学校法人上智学院公式サイト「事業計画書・事業報告書・財務状況(決算資料)」をご確認ください。

▶学校法人上智学院公式サイト

<https://www.sophia-sc.jp/info/gakuin.html>



訃報

庄野 克房 名誉教授逝去

5月28日死去。90歳。1934年生まれ。56年京都大学理学部物理学科卒業。70年本学理工学部非常勤講師、71年同助教授、73年同教授。99年から本学名誉教授。

77年1月~79年9月理工学研究科電気電子工学専攻主任、82年4月~84年3月理工学部電気電子工学科長を務めた。

著書に『CMOS LSIエンジニアリング』(日刊工業新聞社)『半導体技術上・下』(東京大学出版会)など。専門は半導体工学、固体電子工学。

SUP 上智大学出版 新刊紹介



■『遠藤周作とフランソワ・モーリヤック 誘惑と母性』福田耕介【著】(1,700円+税)



■『辺境からコロンビアを見る 一可視性と周縁性の相克』幡谷則子、千代勇一【編著】(2,400円+税)

ぎょうせいオンラインショップ、全国主要書店および紀伊國屋書店上智大学店で販売中。



ぎょうせいオンラインショップはこちらから

最終日まで接戦、昨年の雪辱を果たす 第65回上南戦、2年ぶりの単独総合優勝

第65回上南戦(上智大学・南山大学総合対抗運動競技大会)が、南山大学を主会場として7月5日から7日にかけて開催され、熱戦を繰り広げた。上南戦は1960年の第1回大会から半世紀以上続く伝統のスポーツ対抗戦であり、両大学で1年ごとに会場を入れ替えて実施している。上智大学で行われた前回大会では、引き分けによる両校総合優勝となり、4年連続の単独総合優勝が途絶えた。今年度は気持ちを新たに「Regain」をスローガンとして掲げ、強い上智を取り戻すべく、各団体や関係者が一段と奮起して挑む大会となった。

6月に行われた前哨戦では南山大学が優勢の結果となったが、大会初日のハンドボール、ラグビー、硬式野球の全てで勝ち星を獲得。特に6年ぶりとなる硬式野球での勝利は、本学に勢いをもたらした。

2日目は南山大学の粘り強い猛攻が続いたが、この日深夜の最終試合となったアイスホッケーでは見事勝利し、翌日に弾みをつけた。ここまでで本学側の13勝12敗となり、両大学のプライドを懸けた熾烈な優勝争いは最終日までもつれ込んだ。

最終日には、上南戦実行委員長の瀬山大稀さん(法国3)が所属する卓球部が男女ともに勝利。両大学譲らぬ試合展開が続いたサッカー部も、PK戦の末6年ぶりの勝利を収め、総合成績は16勝14敗となった。多くの感動と出会いを生んだ大会は、本学が昨年の悔しさを晴らす、悲願の総合単独優勝達成という形で幕を閉じた(通算成績40勝17敗6引分)。

また、例年に続き文化団体の交流を図る「Johann Meets EXPO 2024」も同日で開催。「戦わない上南戦」として、合同ライブやワークショップ、両大学の類似団体同士による交流



選手たちへエールを送る応援団



7年ぶりの劇的勝利となった男子ラクロス部



サッカー部はPK戦の末に勝利

企画などが開催され、互いに親睦を深めた。

大会後には、上南戦での活躍をたたえ、上南戦学長賞と特別賞が発表された。受賞団体・受賞理由は次のとおり。**上南戦学長賞**

▶男子ラクロス部:接戦中、サドンビクトリーの末に7年ぶりに勝利した。

▶ソフトテニス部(男子):最後の1ペアで5ペアに連勝し、昨年の敗北の雪辱を果たし勝利した。

▶硬式野球部:6年ぶりに勝利し、上智の勝利を勢いづけた。

▶サッカー部:両チーム拮抗した展開でPK戦の末、6年ぶりに勝利し単独優勝に貢献した。

上南戦特別賞

▶応援団:猛暑に負けず精力的に各部を応援し、大会を盛り上げた。

は、華道部による生け花も並び、笹飾りや生け花を背景に友人と写真を撮り合う姿が見られた。

6号館前広場では、昼休みにあわせ射的や輪投げで日本文化体験ができる「縁日」のコーナーを企画。終了間際まで大勢の参加希望者が列をなした。夕方からは同じ場所、New Swing Jazz Orchestraによる管楽器演奏も披露された。

留学生たちが多く集まっていたのがホフマン・ホール周辺だ。館内の和室では、書道と茶道体験を実施。浴衣姿の留学生たちが、書道部員の手本を見ながら真剣な手つきで葉書に文字を書き写していた。

上智浴衣デー2024代表の松本莉奈さん(SPSF総社2)は、「あいにく雨天での開催となりましたが、多くの学生が参加してくれました。恒例の企画に加え、今年初の試みとして、PRONTに直接交渉し、『さくら抹茶ラテ』を特別に販売しました。少人数で大規模なイベントを運営するのは毎年大変ですが、メンバーが全力で準備に取り組んでくれたおかげで、雨の中でも成功裏に終えることができました」と話している。

上智浴衣デー2024

夏のキャンパスの風物詩として開催11年目

7月12日、四谷キャンパスで「上智浴衣デー2024」が開催された。小雨の降る中での実施となったが、学内は浴衣姿の学生たちでにぎわった。

浴衣デーは、留学生に日本の伝統的な文化を体験してもらうことや、学生と教職員の交流を通して、キャンパス内でのコミュニケーションが活性化することを目的として、2013年に創立100周年記念企画として始まり、今年で11年目を迎えた。主催は、イベントの企画や運営を行う課外活動団体nexnect。

終日、ホフマン・ホールなど学内に数カ所の着付け部屋を用意。11号館ピロティでは浴衣販売が行われ、購入した浴衣をその場で着付けてもらう留学生の姿も見られた。

6号館1階には言語教育研究センターとの共催で短冊に願い事を書く笹飾りを設置。さまざまな言語で書かれた短冊が笹の葉を彩った。同じフロアに

ひと

パリ五輪にパラオ代表として出場 美しい海原で鍛えた泳ぎを発揮

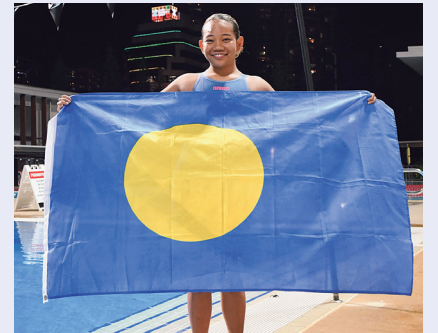
7月から開催中のパリオリンピックに、競泳女子50m自由形のパラオ代表として出場を果たした学生がいる。パラオ人の父と日本人の母を持つホセイ有菜(ゆり)さんだ。

太平洋に浮かぶ自然豊かな島国、パラオ共和国。ダイビングの聖地の異名を持つほど、その海は透明度が高く美しい。「パリでは自己ベストを狙います」と話すホセイさんのアグレッシブな泳ぎは、日本からはるか3,000km離れた故郷の青海原で育まれた。

ホセイさんは6歳から18歳までパラオで過ごした。「家のすぐそばには海があり、泳ぎながら魚を釣って遊んだり、ビーチで友人と話したり、日常生活の一部と言っていいほど海は身近な存在でした」

8歳からコツコツと水泳を続けてきたホセイさんに転機が訪れたのは21年。世界水泳の選抜メンバーとして声が掛かった。「国を代表して泳ぐという責任感やプレッシャーが、自分にとって良い刺激となりました」

しかし、パラオの練習環境は、他国と比較しても整っているとは言えない。「パラオには競泳用プールが1つしかなく、使えない時は海で練習することになります。波や潮の流れに押し戻されながらも、50m先



SPSF※総合人間科学部教育学科1年
※Sophia Program for Sustainable Futures
ホセイ有菜さん

に浮いたブイを目指してひたすら泳いでいました」

荒波にもまれながら練習を重ねた甲斐あって、世界水泳でも結果を残せた。「タッチ板と呼ばれる競泳用のタイム計測器を初めて使ったら、自己ベストが3秒も伸びたのには驚きましたね」

23年9月に進学した上智大学では、即決で水泳部に入部した。「日本の競技レベルはパラオよりも高く、技術面や精神面でも学ぶことが多いです。日本での新生活にも慣れてきた頃、パラオにいる母親からオリンピック出場決定の報告を受けました。パラオで支えてくれた方々への感謝の気持ちと、日本で出会った新たな仲間との絆を胸に、世界の舞台で泳げる喜びを感じながら力を出し切ります」

2020東京パラリンピック出場選手と学ぶ 車いすフェンシング体験会

6月9日、特別ゲストに2020東京パラリンピックに出場した加納慎太郎選手を招いた「車いすフェンシング体験会」を四谷キャンパスで開催した。本イベントは、ハンディキャップを抱えた人々の視点からスポーツを体験することでマイノリティへの理解促進を狙うと同時に、スポーツへのアクセスが少ない身体障がい者にパラスポーツという選択肢があることを認識してほしいという目的から、本学フェンシング部が企画し、一般社団法人日本パラフェンシング協会と、公益社団法人東京都障害者スポーツ協会の協力により実現。本学学生や教職員など約90人が参加した。

冒頭、加納選手がパラスポーツとの出会いや東京パラリンピック出場時の様子を紹介し、パリパラリンピックへの意気込みを語った。

続いて、加納選手と外国語学部フランス語学科卒業生で公益社団法人・日本フェンシング協会常務理事、フェンシング部名誉OBの和田潔氏、マイノリティ研究を行う本学学生によるパネルディスカッションを実施。マイナー・



障がいの有無や国籍、年齢を超えて
パラフェンシングを楽しんだ

スポーツであるフェンシングおよびパラフェンシング普及や日仏のパラスポーツ比較などについて議論した。

最後に、フェンシング部員によるデモンストレーションのあと、参加者同士でパラフェンシングを体験。参加者の多くが初めて剣に触れるフェンシング未経験者だったが、東京パラリンピック出場経験のある加納選手との対戦を楽しめる貴重な時間となった。

同イベントを主催したフェンシング部の副主将兼男子部部长で、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の学生職員でもある吉岡聖都さん(外葡3)は、「今後も、よりインクルーシブなキャンパスづくりを、学教職の『ALL SOPHIA』で目指していきたい」と振り返った。



雨にも負けず多くの学生が浴衣を着用



松本さん(写真中央)と運営メンバー